

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 藤野陽平

【所属】 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所(助成決定時)

【研究題目】東アジアのキリスト教と植民地主義の関係性ー台湾と韓国の比較から

【研究の目的】

本研究は東アジアのキリスト教を社会的文脈に即した形で分析することで、従来の図式とは異なるキリスト教研究を提示し、より論理的に普遍化できるモデルを提示することを目的とする。従来の文化人類学におけるコロニアリズムとキリスト教の関係性に関する研究は、近代科学に基づいた知識を導入する文明化、強大な軍事力を背景とする植民地化、キリスト教宣教としての福音化が三位一体化し非西洋地域に大きなインパクトを与えたことが指摘されてきている(杉本良男編 2002『福音と文明化の人類学的研究』国立民族学博物館)。確かにキリスト教とコロニアリズムの関係性は強く、その背景には西洋社会がもちあわせていた自文化中心主義的な文明観を指摘できよう。しかし、東アジアのコロニアリズムには非キリスト教国の日本が関与しており状況が異なる。そこで本研究では台湾と韓国のキリスト教を文化人類学的なフィールドワークによって得られる情報をもとに分析する。

【研究の内容・方法】

本研究ではフィールドワークによるインタビュー、参与観察、文献収集などの研究方法を採用した。インタビューではライフヒストリーを採集した。宗教内の場面はさまざまな局面でなされる説明体系は相当複雑である。できるかぎり多くの事例を収集し、類型化をすすめた。参与観察では各種の宗教行事と共に当事者の生活の様々な局面への参与を行った。中心は彼らの実感に近い言説分析となり、参与観察は補助的役割を担っている。具体的には本研究では以下の3回のフィールドワークを実施した。

第1回目は10月上旬に実施した韓国のプサンにおける在韓華僑教会のフィールドワークである。韓国第2の都市であるプサンはプサン港を中心に発達した港町でもあり、多くの華僑が暮らしているが、プサンのチャイナタウンにも華僑教会が存在する。この調査では土曜日の青年会の集会と日曜日の礼拝に参加し、その模様を動画で記録した。また、簡単な信者へのインタビューも実施した。

第2回目は2月に韓国のソウルで中華系教会のフィールドワークを実施した。特にソウルの華僑教会には付属の図書館があり、華僑・華人のキリスト教関係の書籍、韓国のキリスト教関連の書籍を多数所蔵しており、平日は文献調査を中心に行い、香港を中心とする華僑系教会のネットワークの存在が明らかになった。また、土曜日は韓国における真イエス教会の集会の参与観察、日曜日には華僑教会の参与観察を実施した。

第3回目の調査として3月に台湾の台北でキリスト教の日本語教会とキリスト教系日本語デイケアセンターのフィールドワークを実施した。台湾には戦前に教育を受けた世代に今日でも日本語が母語である人々が存在している。また、戦後も台湾に住み続けた日本人妻も存在している。彼らのうちキリスト教徒が多く集まる施設に日本語礼拝とキリスト教系日本語デイケアセンターがある。この調査ではこちらで参与観察を実施し、多数のインフォーマントからライフヒストリーのインタビューを実施した。

【結論・考察】

現時点までに本研究が得られた知見は以下の3点である。

・台湾の「日本語」とキリスト教

台湾で日本語を母語とする人々がいる。戦前に日本語教育と受けた人々と、戦後も台湾に留まった日本人妻である。ともに国家や国境、文化、言語、宗教、世代といったカテゴリーの狭間に置かれてきた人々である。ポストコロナの時代を生き、カテゴリーの狭間におかれた彼らにとってキリスト教がそのアイデンティティ回復のツールとなっているさまが明らかになった。

・中華系キリスト教会

今回の調査で華僑華人系のキリスト教のネットワークの存在が明らかになってきた。現在中国国内では政府公認の教会以外は地下教会と呼ばれ違法であって、外国からキリスト教の宣教を行うことはできない。こうした華僑華人系のキリスト教ネットワークが出稼ぎや留学のために国外に出てきた中国人に対して宣教活動を行っており、戦後の中国キリスト教を考える一つの要因となることが明らかになった。

・真イエス教会の日本・韓国での展開

当教派は中国で成立し、戦後は台湾を中心に成長した教派だが、韓国宣教のきっかけは戦前の日本を介している。戦後は各国で個別に活動していたのだが、行き来が可能になるにつれ交流を再開した。植民地主義以降の東アジアのキリスト教を考察するに適した事例であることが明らかになった。